

- 6) 田浦武雄, 潮木守一, 日比 裕: 現代教育の原理. 名古屋大学出版会, 1990.
- 7) 梅垣 弘編: 医師のための登校拒否119番. ヒューマンティワイ, 1990.
- 8) 山下文雄編: 小児科MOOK No. 60 子どもの心の問題. 金原出版, 1991.
- 9) 「新保母養成講座」編纂委員会編: 新・保母養成講座第4巻 精神衛生. 全国社会福祉協議会, 1991.
- 10) 松井 豊, 林もも子, 井上果子, 沢崎達夫, 増茂尚志, 賀陽濟: 臨床心理リーディングガイド. サイエンス社, 1991.
- 11) 安藤春彦, 熊代永, 中根允文: 小児精神医学. ヒューマンティワイ, 1991.
- 論文
- 1) 若林慎一郎, 藤川明彦, 江口 研, 水谷秀子, 大野智裕, 森崎郁夫, 吉崎 剛, 星 融, 本城秀次: 心理的・社会的要因の関与した児童思春期病態についての疫学的研究——(その2) 精神科外来における児童・思春期患者の実態. 児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究, 昭和63年度研究報告書, p. 27-39, 1989.
- 2) 本城秀次: 登校拒否に伴う家庭内暴力の治療. 精神科治療学, 4 ; 699-707, 1989.
- 3) Shuji Honjo, Chiaki Hirano, Satomi Murase, Toshiko Kaneko, Toshiro Sugiyama, Kazunori Ohtaka, Takashi Aoyama, Yoichi Takei, Kayo Inoko, Shinichiro Wakabayashi: Obsessive-compulsive symptoms in childhood and adolescence. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 80 ; 83-91, 1989.
- 4) 久保田さち, 本城秀次, 安田魔子: 幼児期に虐待を受けた一児童のロールシャッハ・テスト. ロールシャッハ研究, 31 ; 111-122, 1989.
- 5) 本城秀次・観音林恵子: 9歳で摂食障害を呈した女児症例について——anorexia nervosa および depression の視点から——. 児童青年精神医学とその近接領域, 30 ; 343-354, 1989.
- 6) 若林慎一郎, 江口 研, 水谷秀子, 藤川明彦, 小出浩之, 清水章子, 本城秀次: 心理・社会的要因の関与した児童思春期病態についての疫学的研究——(その3) 精神科外来における児童・思春期患者の実態. 児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究, 平成元年度研究報告書, p. 5-20, 1990.
- 7) 本城秀次: 登校拒否, 家庭内暴力の病前性格と治療関係. 精神科治療学, 5 ; 1143-1153, 1990.
- 8) 辻井正次, 幸 順子, 本城秀次: CDIによる児童期の抑うつ状態に関する研究——心理相談ケースを対象として——. 発達の心理学と医学, 1 ; 387-394, 1990.
- 9) 武井陽一, 本城秀次, 平野千晶, 相羽紅美, 杉山登志郎, 金子寿子, 村瀬聡美, 大高一則, 青山 隆, 猪子香代, 若林慎一郎: 若年発症の anorexia nervosa 及びその近縁症例の臨床的特徴について. 発達の心理学と医学, 1 ; 403-411, 1990.
- 10) 辻井正次, 幸 順子, 本城秀次: 児童・思春期の抑うつ状態に関する研究——健常児童を対象として——. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 37 ; 129-139, 1990.
- 11) 若林慎一郎, 小出浩之, 高岡 健, 江口 研, 水谷秀子, 植木啓文, 本城秀次, 杉山登志郎, 平野千晶: うつ状態の臨床(その1). 児童・思春期における行動・情緒障害の成因と病態に関する研究, 平成2年度研究報告書, P. 3-12, 1991.
- 12) 幸 順子, 辻井正次, 本城秀次: CDIによる児童期の抑うつ状態に関する研究 II——情緒障害児短期治療施設入所児童の行動評定との関連について——. 小児の精神と神経, 31 ; 113-121, 1991.
- 13) 本城秀次: 児童・青年期の精神障害と発症年齢. 精神科診断学, 2 ; 331-348, 1991.

## 研究経過報告(1992年9月まで)

野 口 裕 之

名大に来て5年目になる。にもかかわらず、この欄に登場するのは2回目である。この前に東京・名古屋が“最速のひかり323号で1時間49分”と書いたが、今では最速ののぞみ303号で1時間36分”になっている。さ

らに、JR東日本のSTAR21計画やJR西日本のWIN350など時速300kmは当たり前となり、技術の進歩には著しいものがある。それに比べて、私自身の進歩ははなはだ微々たるものである。それでもどう風吹き回し

か、今年はこれを書くことにした。

研究成果としては、以前から続けている“項目反応理論における潜在特性尺度の等化”に関して、名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科（1989, 1990）に発表したもの、“項目反応理論の項目パラメータ推定法”に関して名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科（1992）に発表したものがあるだけである。はなはだ情けない状態である。ただ、現在進行中で私自身が力を入れている研究に“鉄道運転関係職員の適性“に関わる心理検査の作成というテーマがある。東日本旅客鉄道会社からの受託研究として実施しているもので、鉄道に関係のある素材を使って項目を作成し、尺度構成に項目反応理論を用い、テストの実施はコンピュータ支援の適応型テスト方式で行なうというもので、研究そのものを楽しんでいる。まだ成果を発表するには至っていないが、今後順次報告するつもりである。自分自身納得がゆき、しかも面白い研究をする機会に恵まれたことを喜び、関係各位に感謝するものである。

研究成果ではないが、項目反応理論の教育・普及にも力を入れてきた。項目反応理論——基礎と応用——（東大出版会、1991）の1章を分担執筆し、さらに、Educational Measurementの第3版の第4章項目反応理論（翻訳では項目応答理論になっている）を担当して翻訳したものが間もなく出版される予定である。教育活動として名古屋大学をはじめ複数の大学院で項目反応理論

をとりあげて講義してある（1992年度）。項目反応理論を広く知ってもらうことが大切と考えているので、研究者としては評価されないかもしれないが、今後とも力を入れてゆくつもりである。

その他に、“外国人のための日本語能力試験”に評価・分析担当の調査員として協力している。これは本教室の村上助教授が精力的に続けて来られた仕事で、それに私が項目反応理論に基づく分析を行なうお手伝いしているものである。これまでは報告書が非公開であるなど、色々な制限があったが今年から公開され、他の研究者からも助言を得られるようになった。やっておきたい分析・やっておいた方がよい分析も多数あるが、現在のところ諸般の事情から実施していない。

というように、あまり大した仕事もしないまま“不惑”の歳を迎えてしまった。さらに間もなく“厄年”である。体力的には大学院時代のような無茶ができなくなって来つつある。それにひきかえ公私共に雑用の数はかなりのものである。雑用をこなしていると、何となく仕事をしているような気になってしまうのが恐ろしい。時間のたっぷりあったあの時代にきちんと勉強して来なかったことが悔やまれる。といっても仕方がないので、これからは、相対的に恵まれた研究条件に感謝しつつ、じっくりと納得のゆく研究・勉強を進めて行きたいと考えている。

## 研究経過報告

池田博和

1990年秋以降、2年間の経過についてまとめておくことにしたい。

### 1. 登校拒否研究

「登校拒否に関する研究 第Ⅳ報 身体性の問題 その2」を平石賢二ほかとの共同執筆で、本学部心理教育相談室紀要「心理臨床」第6巻（1991）に、また、「登校拒否に関する研究 第Ⅴ報 不登校生徒の合宿体験」を吉井健治との共同執筆で本紀要、第38巻（1991）に載せた。後者の概要は「不登校児童・生徒の合宿体験について 第Ⅰ報から第Ⅵ報」と題して、東海心理学会第40回大会（1991.5）において、北浦茂ほかと共同で発表した。

この合宿体験にもとづいて、本年3月にはあらためて「ヨコ体験合宿」と名づけた不登校生徒のための合宿を

企画、実施した。これはわれわれの登校拒否についての本質把握に直結したグループ・アプローチの試みであるが、合宿後も同じ参加者による定期グループを継続しており、相当のいわゆる「治療」的效果をあげつつある。これを単なる「体験」ととどめず、臨床的本質把握をさらに深め、このような実践を理論的に基礎づけ公共化する「経験」へと高めるために今後、一層の検討、考察を加えていきたい。とくにボランティアで参加してもらった若い学生、院生の活躍、感性には目を見張るものがあり、「メンタル・フレンド制」の導入がされたりして、登校拒否問題に対する受け皿の裾野が非常に広がりつつある今日、このような心理学的基礎づけを行っておくことは重要な意味を持つものと思われる。

われわれの登校拒否研究会では、これまでの約10年間